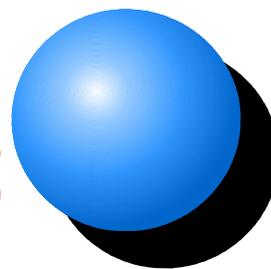




ゆい ・まーる



★VOL 22 令和4年3月3日



絵本の楽しさをあすそ分け

■「パンツ！」

藤本ともひこ／作

表紙と裏表紙を見るだけで楽しくて笑える作品だとすぐ分かります。●〈パンツ〉を



題材に楽しめるのは絵本ならではの子どもの特権です。●動物や建物、いろいろなものがパンツをはきますが、子どもは絵を見た瞬間に笑いはじけ、次のページはどんなはき方をするのかワクワクすることでしょう。おもしろさがまっすぐに目に入ってくる作品です。●1歳半くらいから。

■「バスがきたよ」

藤本ともひこ／作

表紙に描かれている金魚、サル、おばけ、パンダがバス停で待っているとバスがやってきます。●そのバスの描き方が一種のしかけになっていて、どんなバスなんだろう？という期待と、分かったときのスッキリ感がおもしろさになっています。●「パンツ！」同様、絵のインパクトが強い作品。●2歳半くらいから。

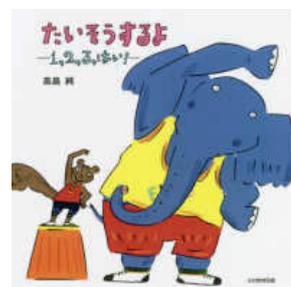


■「たいそうするよ 1.2.3はい！」

高島純／作

いろいろな動物たちと体操しながら遊べる絵本。

●ラジオ体操のような動きの流れがあり、



ページを前後にめくり直すことで動物たちの動きを2倍楽しめる仕掛け。●一度読んでもらってから親子で動物の体操をすると、おもしろさもアップします。作者独特の絵が何とも言えない味を出しています。

●3歳くらいから。

■「しあわせぎゅ〜つ」

ジーン・リーディ／作 ジョーイ・チョウ／絵

ぎゅ〜つと抱きしめる・抱きしめられる心地良さが全ページにわたって描かれています。●なめくじが誰かをくぎゅ〜つ」としたいな



と思っていると何だかさびしそうなクワガタと出会います。なめくじはクワガタに、〈ぎゅ〜つ〉とするとさびしい気持ちが飛んでいくよと言いつつくぎゅ〜つ!。●幸せな気持ちになった2匹はネズミと出会い…くぎゅ〜つ〉をくり返しながら動物が

どんどん増えていきます。●〈ぎゅ〜つ〉がなかなかできない今の状況の中で、これが大事なのと伝えてくれる作品。●2歳くらいから。

■「わたしはあかねこ」

サトシン／作 西村敏雄／絵

黒ねこのお父さん、白ねこのお母さんから5匹の子ねこが生まれましたが、1匹だけ赤い子ねこ。●家族は、赤い子ねこをかわいそうに思い、白くさせたり、黒くさせようとします。赤ねこは自分の色がきれい好きなのですが、誰も分かってくれません。自分を理解してくれないことほど悲しいことはありません。赤ねこはどうすればいいのでしょうか…。赤い子ねこの解決法は現代的でスマート。物語とは言え拍手！です。●4歳くらいから。●40年近く前の作品で「おかえりなさいスポッティ」（マーガレット・レイ／文 H. A.レイ／絵）という作品があります。白うさぎの両親から生まれた子うさぎの中でスポッティだけが茶色のもようがあり、青い目をしています。兄弟は皆スポッティが好きですが、両親はおばさんや祖父の目を気にしています。●解決の方法は違いますが、〈違い〉と〈自分らしさ〉は、子どもにとって大事なことなんだなと気づかせてくれます。



■「だれかさんのかたっぽてぶくろ」

すずきみほ／作

できすぎのお話ですが、楽しさいっぱいの作品。●まこちゃんがお姉ちゃん、犬のくんと土手までお散歩。途中でまこちゃんは片方だけの手袋を2つも見つけます。●お話は、散歩を続けながら〈手袋〉を介して出会う人たち



とのやりとり…偶然の出会いから生まれる気持ち良さが心に残ります。そして〈手袋〉が回り回って最後はまこちゃん自身に戻ってくところが楽しさのクライマックス。●4歳くらいから。●文中、〈手袋をはめる〉という言い方がありますが、〈手袋をはく〉北海道人にはピンとこないかも…。

■「ひめさま！

ぞうはすごくおおきいでござる」

丸山誠司／作

お姫さまのお城に遠い国からゾウがやってきます。お姫さまが待ちきれず、じいに「はよーみたいぞよ」と催促。そこへじいが手配した各地の忍者からゾウが通ったことや大きさ、特徴が伝えられますが、忍者はその土地の言葉〈方言〉で話すので、言葉の意味が分かりません。じいが勝手にお姫さまに訳して伝え、それをお姫さまが大きな紙に想像のゾウを筆で書き上げます。●見たことのない動物を思い浮かべる期待と地域性に富んだ方言がもたらす勘違いが、笑えて楽しいゾウとお姫さまの対面につながります。●各地の忍者がいい味を出し、見開きのページいっぱい広がるお姫さまの絵が愉快です。●言葉と絵の両方を楽しむ作品。4歳くらいから。



■「チリとチリリ よるのおはなし」

どいかや／作

シリーズ8作目。●2人の女の子がいろいろなところへ自転車で出かけ、不思議で楽しい体験をするかわいらしい物語。今回は、夜の森へ出かけ、猫たちの歓迎を受けます。●やさしく温かい色づかいの絵とチリとチリリが不思議さを受け入れて楽しむ微笑まじさが魅力。●3歳くらいから。



■「ソラモリさんとわたし」

はんだ浩恵／作

作中の文を借りて伝えるならば、

「言葉をちゃんと使えるひとになれば、言葉にならない心が読めるようになる」〈言葉レッスン〉の物語。●

小学校6年生の美話が秘密のノートを落とし、それをソラモリさんという女性が拾ったところから物語が始まります。ノートには童謡の歌詞コンテストに出す中途半端な作品がたくさん書いてあります。ノートを拾ったソラモリさんは、映画のキャッチコピーを考える言葉のプロ。●美話は知らず知らずソラモリさんを通じて〈言葉をちゃんと使う〉トレーニングを始め、自分で〈言葉〉を探し…中途半端だった童謡の歌詞が完成するときの心の輝きがステキです。●もう一つ、交通事故で亡くなった母親との思い出を封じている美話が自身と向き合うことも大事なテーマ。●〈あとがき〉には、〈今の時代〉に対する作者の言葉への想いが込められています。●小学校高学年から中高生に。



■「君色パレット」

ちょっと気になるあの人

戸森しるこ ひこ・田中

吉田桃子 魚住直子

サブタイトルが「多様性をみつめるショートストーリー」。

4人の児童文学者が共通のテーマで綴るアンソロジー。1話ごとの終わりに1行で表現した〈気になる人の気になること〉が物語を振り返る役目を果たしています。●今回は、2話目と4話目を紹介。2話目は「親がいる。」(ひこ・田中)。コロナ禍でリモートワークをしている両親と



オンライン授業を受けているわたしが今まで体験したことのない毎日家族がいる不思議さと、仕事をしている両親、親ではなく仕事をしているおとなの面を見てしまうわたしの気持ちを新鮮な目で描く今の物語。

●4話目は「Hello Blue!」(魚住直子)。店を閉める洋品店の店番をしている男の子を介してその店を訪れる3人の子どもたちが幸せな気持ちになっていくさまを、連続する場面のように描いています。●物語の最後に店番の男の子がおとなから見るとどう思うのかさらっと明かされますが、〈普通〉〈自分らしさ〉って何だろう?を自然と感じられる作品。男の子の「自分を生きているのは自分…」という言葉が現代を表しています。●中高生からおとなにも。

■「天の台所」

落合由佳／作

物語の最後の方で主人公の天が言う言葉「まずは元気な大人になるために、おれは作って、食べるんだ」が印象的な作品。

●母親を交通事故で失い、料理がじょうずな祖母、父親、兄弟3人で暮らしていた家族が、祖母の急死で生活が一変します。食事は父親が買ってくる惣菜中心で、味付けや栄養などは二の次状態。●ある日、天は、子どもたちが〈がみババ〉と呼ぶ近くの小さな店のおばあさんから強引にキャベツの千切りをやらされたり、ダシの効いたいい匂いのミソ汁をごちそうになりつつ、天はがみババの料理の腕や知識にさそわれ、料理を通して生きていく目標やバラバラだった家族の絆を取り戻していきます。●祖母が大事にしていた台所とごく当たり前だけれど心のこもったおいしい料理がどれだけ大切なものなのがあることに兄弟でチャレンジし、祖母の思い出の料理でつかみ取るところが一番の読みどころ。がみババがとても魅力的。●小学校中高学年に。

